

平成26年度 第3回新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日 時：平成26年9月1日(月) 午前10時00分～正午

会 場：市役所別館 2階 会議室

出席者：10名

出席者	村山伸子アドバイザー 下條荘市委員長、佐藤ミネ副委員長、鈴木様(中村和浩委員代理)、中村明委員、藤田健委員、宮尾俊輔委員、佐藤恭子委員、高橋賢司委員、関根暁子委員
事務局	宮崎企画政策課長 寺尾課長補佐 企画政策係(高山係長、吉田主任、大淵主事)

(欠席者)

三田村秀之委員、高山廣伸委員、阿部慎委員、小野洋平委員、中野浩一委員、渋谷知明委員、佐藤涉委員、津村賢委員

1 開会

2 あいさつ

【下條委員長】

新発田まつりも終わり、夜が涼しく、秋らしくなってきた。

本日の第3回会議では、「食の循環しばたリレートーク」や「お弁当選手権！」の詳細について協議する予定なので、よろしく願います。

また、本日はアドバイザーとして村山伸子教授にもお越しいただいた。

【事務局】

本日、新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会のアドバイザーとして、新潟県立大学の村山伸子教授にお越しいただいた。

一言、ごあいさつを頂戴したい。

【村山アドバイザー】

「食の循環によるまちづくり」には、推進計画策定時から関わっている。

このまちづくりの特徴は、「肥料づくり・土づくり」から始まり、「栽培・収穫」、「加工」、「販売・購入」、「調理」、「食事」、「残さ処理」を経て、それを再び「肥料づくり・土づくり」に活かすという「食の循環」を、目に見える形で実践していくところにある。市外か

らは、多くの注目を集めているが、今後の課題は「食の循環によるまちづくり」をいかに市民の皆さんに普及させていくかということであり、本推進委員会でもその方法を検討してきた。

市内の小・中学生とその保護者を対象にしたモニタリング調査により、「食の循環によるまちづくり」がどれくらい定着しているかを調査したが、小学6年生で「1人で弁当を作れる子ども」、中学3年生で「1人で小煮物(のっぺ)のある夕食1食分を作れる子ども」、それぞれの全体に占める割合が増加していることが分かった。これは、「食の循環によるまちづくり」や「弁当の日」の取り組みの成果のひとつであり、特に小学生は顕著に数値に表れている。しかし、それが保護者に波及していかないことが長年の課題である。

「お弁当選手権！」の取り組みは、子どもだけでなく大人に対する「食の循環によるまちづくり」の普及・啓発になるものと考えている。近年では、新潟市のように地場産食材の販路を海外に拡大することも増えているが、弁当は外国人にとって珍しく、しかも日本の弁当は綺麗なため、外部からの評価も十分期待できるものと考えている。

本日はよろしく願います。

3 議事

(1)「食の循環しばたリレートーク」の日程及び講師について

【下條委員長】

前回の会議で、今年度の「食の循環しばたリレートーク」の講師候補者を決定したが、その後の交渉の結果について、事務局より説明願う。

【事務局】

(資料1に基づき説明)

第1候補の杉浦太陽氏と、第2候補の片岡鶴太郎氏に交渉したが、予算の関係上、講演を依頼することができなかった。

その結果、第3候補の吉田俊道先生に講演を依頼することになり、先日、承諾をいただいた。吉田先生は、自身で土づくりをされていることから、新発田市の「食の循環によるまちづくり」を大いにPRしてくださると思う。また、場合によっては、委員の皆様とのトークセッションや意見交換も可能であると伺っている。

【下條委員長】

吉田先生は遠くからお越しになると思うが、大丈夫か。

また、トークセッションなどは、吉田先生から打診があったのか。

【事務局】

佐賀県からお越しになるが、問題はないと伺っている。

また、トークセッションなどは、吉田先生からの打診である。講演で新発田市の「食の循環によるまちづくり」に言及していただきたい旨をお伝えしたところ、必要であれば委員の皆様と土づくりや野菜作りについてのトークセッションや意見交換をしてもよいとのことである。

【A 委員】

佐賀県であれば、おそらく EM 菌などを使用していると思うが、新発田市は菌を使わずに、自然の力で生ごみを発酵させている。その違いを吉田先生にお伝えしたほうがよい。

【事務局】

今後、「食の循環によるまちづくり」の資料を送付させていただき、市の取り組みを、事前に吉田先生にお知らせする予定である。

【A 委員】

九州のような温暖な地域で使用している菌は、新潟のような雪深い地域ではうまく機能しないことがある。講演では、そのような地域ごとの違いや、新発田市で菌をどのように活用できるかをお話していただければ、市内での生ごみのリサイクルが、今よりも普及すると思う。

【下條委員長】

吉田先生は、講演を終えられた後、その日のうちにお帰りになるのか。

【事務局】

現段階では、当日の日程までは打ち合わせていないが、講演の内容によっては、宿泊が必要である。宿泊の有無は、講演の内容が決定次第、吉田先生と打ち合わせる予定である。

【下條委員長】

せっかく吉田先生に来ていただけることから、講演の前後の時間を有意義に使い、吉田先生と私たち委員の懇談の場を設けたい。

皆さんはどのようにお考えでしょうか。

【B 委員】

情報交換できるのであれば、ぜひしたい。

【C 委員】

せっかくなので、懇談したい。

【D 委員】

講演を聴いた後の方が、話も分かるし、吉田先生との懇談も盛り上がると思う。

【E 委員】

演題は、「いのちいただきまあす 4週間で子どもが変わる、食の実践～学力向上は食から～」となっているが、当日、多くの方にお越しいただくことが一番の目的であるから、講演の中身は、あまり専門的でなく、子育て世代が家庭で気軽に実践できる食の話がよい。土づくりのような専門的な話は、子育て世代には分かりづらく、実践も難しいと思うので、演題に沿った分かりやすい話の後に、それとは別に専門的な話を聴く場を設けたほうがよい。

また、トークセッションより、質問コーナーなどを設けるほうが集客につながると思う。

【佐藤副委員長】

多くの方にお越しいただくために、演題をいかに分かりやすいものにするかが重要。若い方が聴いてみたいと思うような演題であれば、大いに集客できる。

【村山アドバイザー】

過去のリレートークで、ターゲットとテーマと来場者のそれぞれの関係性について事務局ではどのように分析しているのか。

【事務局】

これまでのリレートークは、著名な講師に興味があるから来たという方が多かったという印象を受ける。毎回、ターゲットを設定してはいるが、実際の来場者は必ずしも狙い通りにはなっていない状況である。

【村山アドバイザー】

第31回の南雲先生の講演は、主に50代以上の方が興味を持ちやすいテーマであり、第32回の長谷川先生の講演は、食事づくりに関心がある方が興味を持ちやすいテーマであると思う。これを踏まえ、第33回の吉田先生の講演は、若い方ではなく、生産者をターゲットにした方がよいと思う。

【事務局】

吉田先生は、自身で土づくりをしていることから、「食の循環」になじみがあるため、

講師候補者になった。このことから、土づくりをテーマに講演していただくことが本筋ではあるが、食育にも言及するとのことであり、吉田先生との打ち合わせの結果、このような演題になった。生産者をターゲットとしながらも、同時に子育て世代へ PR して、来場者の幅を広げるという狙いである。

【下條委員長】

「食の循環によるまちづくり」の実践が、家庭で少しずつ芽生えていくためにも、子育て世代に講演を聴いていただきたいが、これまでのリレートークでは、生産者をターゲットに開催したことがなかったので、それも面白いと思う。

【事務局】

リレートークの目的は、「食の循環によるまちづくり」の普及・啓発なので、市内の生産者団体にも積極的に PR して、「食の循環」になじみのある人々を増やしたい。

【A 委員】

演題に、「学力向上は食から」とあるが、私は、食生活がしっかりしていると学力も向上すると思っているので、ぜひ学校の先生にも声をかけて、講演を聴いていただき、食の大切さをさらに知って欲しい。

(2)「お弁当選手権！」開催概要について

【下條委員長】

このことについて、事務局より説明願う。

【事務局】

(資料2に基づき説明)

【下條委員長】

美味しそうだとか、栄養バランスがよいとか、そういったことは審査対象にしないのか。

【事務局】

「お弁当選手権！」の審査では、味ではなく、「食の循環」に対する考えや、それに基づいたレシピに重点を置き、審査することとしたい。

【F 委員】

チラシを見ると、主催が新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会とあるが、可能

であれば新発田市教育委員会の後援や、市内の企業の協賛をいただきたい。それにより、保護者が安心して子どもを参加させることができるし、「お弁当選手権！」を数十回続くような大イベントにしていくことも可能になると思う。

また、審査では、見た目より味の方が重要だと思うので、せめて入賞者には、実際にお弁当を作っていたきたい。

また、優勝賞品は現金ではなく、商品券や図書券のほうがよい。

【A 委員】

私が開催する料理コンテストでも、実際に作っていただいた料理を食べて審査している。書類のみで審査を行う場合とでは、やはり結果も変わってくると思う。

優勝賞品は、他の同様の大会では、現金ではなく図書券が多い。

【下條委員長】

応募数が多かった場合、作品を並べて審査することまでは可能だが、食べて審査することは現実的に難しくなってくる。

【A 委員】

それぞれの作品とは別に、お弁当に使用したおかずを一品、大皿に盛って置いておけば、審査員はそれを試食することが可能である。

【下條委員長】

事務局は、およそどれくらいの応募数を見込んでいるか。

【事務局】

通常、調理実演や試食をした上で審査するものであると思うので、書類審査は、審査員の皆様を非常に悩ませるものであるが、応募者にとっては書類のみで気軽に応募できるという利点もある。今回、そのような狙いもあり、あえて書類審査としたため、それなりに多くの応募数を想定している。

【B 委員】

「食の循環」は、「調理」だけでなく、「肥料づくり・土づくり」や「栽培・収穫」など非常に多岐にわたるものだが、それをお弁当ひとつで表現することは、応募者にとっては少し難しいので、工夫が必要である。

【C 委員】

お弁当の作り方や味も審査対象にできたらよい。

【事務局】

会場が調理場ではないため、実際に調理するところを見ることはできないが、12月7日(日)の審査結果発表会では、入賞者に作品を持って来ていただき、審査員はそれを試食しながら審査していただくことを想定している。

【A 委員】

「調理」だけでなく、「食の循環」の全体について参加者に知っていただくためにも、食材をまるごと使い切っているかどうかや、環境に優しいかどうかなども審査対象にしたい。

【事務局】

応募用紙には、そのような工夫した点や、「食の循環」をどのように表現したかなどのコメントを記入する欄を設けており、当然そのコメントも審査対象とする。

【G 委員代理】

お弁当を作ることと、「食の循環」を表現することのどちらがメインであるかをはっきりさせることで、応募者も迷わずに済む。

【D 委員】

「選手権」という名称は、競い合うという印象が強いため、もっと気軽に参加していただけるような名称にしたい。

【E 委員】

高校生に「食の循環によるまちづくり」を学んでいただくことを目的として、当初、高校生を対象としたため、優勝商品を現金にしたと記憶しているが、小・中学生まで対象を拡大するのであれば、優勝賞品を再度検討しなければならない。

【下條委員長】

学生の部の優勝賞品は、現金ではない方がいいという意見が大半を占めた。

また、競い合って順位を決めることよりも、気軽に参加でき、大勢の方に「食の循環によるまちづくり」について考えていただくことに重点を置くという意見も出た。

12月の最終審査では、応募した際に使用した野菜がなかった場合、代替品を使用してよいかどうかなど、細かい部分でまだまだ検討しなければならない事項が多くある。

【村山アドバイザー】

現実的な範囲で、できることからやっていくしかない。

ただ、応募数が少し心配である。同様の料理コンテストを見ていると、応募が集まらな

いために、大学に応募の依頼が来ることがある。佐藤委員が開催している料理コンテストは多くの応募があるが、どのような戦略で応募数を増やしているのか。また、どのような方が応募してくるのか。

【A 委員】

ゴーヤのレシピコンテストだが、市内の幼稚園などにゴーヤの苗を配ったり、ゴーヤが多く実る時期に合わせて開催したりしている。また、告知は広報しぼたへの掲載のみだが、20～30件の応募がくる。気軽に応募できる環境づくりは、やはり重要だと思う。

参加者は様々で、料理が得意な女性や、子育て世代の男性などが応募してくれる。参加している皆さんはとても楽しんでおり、賞をもらえなかった方でも、また参加してくれる。

【村山アドバイザー】

長岡市でもお弁当のコンテストを開催しているが、学校だよりに掲載しているためか、応募数は多い。

F委員の意見で、新発田市教育委員会の後援があれば、安心して参加できるようになるというのは、まさにその通りだと思う。

審査基準で、「食の循環」や、新発田の特色を表現することとあるが、調理方法を工夫して野菜をまるごと使い切ることや、新発田の郷土料理などの例示があれば応募しやすくなると思う。

地場産食材とは、特産品に限らず、新発田産の食材であればよいのか。

【事務局】

新発田産のものであれば、野菜はもちろん、米でも地場産食材に該当する。

【下條委員長】

応募数が心配ではあるが、まず一度やってみないと、今後の課題も見えてこない。

新発田市教育委員会の後援は、ぜひいただきたい。

1次審査では、お弁当を試食して審査するよりも、書類審査の方がやはり現実的である。

【村山アドバイザー】

試食をしなくても、応募の際に記入していただくコメントでも審査は可能である。

(3) その他

【事務局】

本日の話し合いの内容を確認させていただく。

新発田市教育委員会などの後援をいただいた上で、お弁当選手権！を積極的にPRする。
賞品は、現金ではなく賞品券などに変更する。

調理方法を工夫して野菜をまるごと使い切ることや、新発田の郷土料理などの例示をして、より応募しやすくする。

1次審査を11月14日（金）に実施する。

【F 委員】

PDF などの電子データを事前に送付することで、1次審査に来られなかった審査員のご意見も審査に反映できるので、ぜひ検討していただきたい。

【下條委員長】

第3回会議の全体を通して、村山アドバイザーからご意見を頂戴したい。

【村山アドバイザー】

新発田市以外にも、「お弁当選手権！」と同様のコンテストを開催している自治体はあるが、新発田らしさを出すためにも、「食の循環」というテーマは外さないほうがよい。また、それでいて市民の皆さんに「食の循環によるまちづくり」を知っていただくために、いかに敷居を低く見せるかがポイントである。

【下條委員長】

多くの方に気軽に応募していただき、まずはいいスタートが切れるようにしたい。

4 その他

(なし)

5 閉会

【下條委員長】

本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

第3回新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会を閉会する。